

キム・スム『誰も帰ってこない夜』
(김숨 ‘아무도 돌아오지 않는 밤’)

2013. 9. 8 桐生裕子

作家 김숨 について

1974年蔚山生れ。1997年に〈느림에 대하여〉で大田日報新春文芸に、1998年に〈중세의 시간〉で文学トネネ新人賞を受賞し登壇。小説集として〈투견 (闘犬)〉、〈침대 (寢台)〉、〈간과 쓸개 (肝臓と胆嚢)〉、長編小説として〈백치들 (白痴)〉、〈철 (鉄)〉、〈나의 아름다운 죄인들 (私の美しい罪人)〉、〈물 (水)〉がある。

2011年〈아무도 돌아오지 않는 밤 (誰も帰ってこない夜)〉でイサン文学賞優秀賞受賞。2013年〈그 밤의 경숙 (その夜のキョンスク)〉で現代文学賞受賞。

作品 ‘아무도 돌아오지 않는 밤’ について

○登場人物

- ・ ヨンスク：夫と舅と一緒に2DKの集合住宅に住んでいる。専業主婦で妊娠7カ月。
- ・ 老人（舅）：妻を亡くし一人暮らしだったが2年前に息子夫婦と同居。偏屈な老人。アヒルの骨を煮込んだスープを四六時中食べている。
- ・ ヨンスクの夫：インク会社の営業社員。舅の金を投資ですった負い目のため帰宅が遅い。
- ・ ヨンスクの母：舅の世話をする娘を心配。愚痴をいう相手。
- ・ 202号室の女、その夫：ヨンスクと同じ集合住宅に住んでいる。舅が30万ウォンを貸した相手。
- ・ あひるの食堂のおばさん：あひるの骨の入手先。ヨンスクの賄いが悪いと思っている。

○時間

- ・ ある日の夕暮れ時から真夜中（12時過ぎ？）の出来事（合間に回想が混じる）

○場所

- ・ ヨンスクが夫と舅と住む2DKの集合住宅

○あらすじ

1. 舅は、いつものようにあひるの骨の煮込みを火にかけてままた方の散歩に出かける。老人の日常は特段することもなく、伝記と聖書の写筆をしたり、散歩に出かけてがらくたを拾ってくる位なものだ。ヨンスクは舅と同居し日常の世話をしている。あひるの煮込みに浮かぶ舅の顔やがらくたの間に横たわる舅を想像し、ぞっとするような嫌悪感を感じる。ヨンスクに男の子が生まれると告げた時、舅の反応はつれなかった。これまでヨンスクに気遣いを見せたこともない。ヨンスクにとって舅は心の中がわからない腹黒い老人となっていた。
2. 夜8時、ヨンスクは夕食の支度をしながら、仕事に出た夫、散歩に出かけた舅、202号の女の帰りを待っていた。舅は202号の女に貸した30万ウォンを今日の夕方返しに来るからヨンスクが受け取って好きに使えと言った。
舅は2年前に中風で倒れて息子と同居することになりヨンスクが面倒をみることになった。ヨンスクの夫が舅のマンションを売った金で投資して失敗し根こそぎなくしてしまったのだった。

3. 10時。舅は2カ月前、シルバータウンに入ろうと自分のマンションを売った金の半分を下してくれと言ってきた。投資の失敗を舅は知らない。夫はその話をするのを避けるかのように毎日夜の帰りが遅い。ヨンスクは妊娠している。舅が使っている部屋を生まれてくる子供のために使いたいと思い、壁紙の色まで想像している。だが舅をシルバータウンに送る金はない。

実家の母に電話して舅の悪口で憂さ晴らしをした後、舅の部屋に入って筆写のノートを見たりしているうちに舅に対する恐怖をはっきり感じる。壁にかかったベレー帽の下に舅が隠れているに違いないという妄想に駆られ確認するが舅はいない。

202号の女に30万ウオンを返してもらいに出向くが、まだ帰っていない。

4. 11時近く。ヨンスクは一旦ベッドに入るが、12時近くになってドアの開閉する音を聞いて202号室を訪ねる。出てきた夫に30万円のいきさつを話す。妻が借金するはずはないとの答えが返ってくる。ヨンスクは路地を歩きまわるが、ある家の前の箆笥を目にし、舅がその中に隠れているのではと戸を開ける。中は空っぽだ。

5. ヨンスクは舅の部屋に戻り筆者の文字をペンでたどってみる。ふと箆笥の中に舅が隠れているのではと思い戸をあけてぎょっとする。舅がいればかりか、古道具がすっかり消えていた。強く押し付けたペンからインクが流れ出て文字を飲み込む。

6. アヒルの骨のスープの火を一気に強くし、からからに干上がるまで煮詰める。

ヨンスクは路地に舅を捜しに行く。

《気になる箇所》

○現実と回想、妄想が入り混じる ←パラノイアの傾向

- ・誰も帰って来ないというシチュエーション→不安（but 安堵、願望でもある）
- ・妊娠や舅の世話で外出できない、経済的にも余裕がない、倦怠感、明るい展望が開けない
- ・舅と嫁の葛藤→舅に対する罪悪感、舅への嫌悪、恐怖

○ヨンスクの舅への感情、態度

- ・妊娠を知らせても無関心、何か買ってもらったこともない→情がわかない、憎らしい
- ・アヒルのスープ、古道具を拾い集める→嫌悪
- ・あひるの食堂のおばさんとの会話→賄いが悪い嫁のレッテルを張られた
- ・嫁の務めとして食事の世話等はするが、見えないところで手抜き
（アヒルのスープを捨てる、食べ残しはゴミ箱へ、洗濯は分けて、トイレはワックスがけ、道で会っても知らんぷり、スープを掬うのも不自由な様子を見て見ぬふり 等）

〈妄想1〉

- ・2人きりの夕食時にじっとみつめられる→不思議な恐怖心
- ・すべて知っていて敢えてだまっているのでは？→ぞっとするような恐怖

〈妄想2〉

- ・①帽子と洋服の下 ②廃棄物置き場に捨てられた箆笥の中 ③舅の部屋の箆笥の中に舅が隠れているのではないか →誰もいない

〈妄想3〉

- ・アヒルのスープを掬うお玉に舅の顔
- ・集めた古道具に囲まれて横たわる舅の姿
- ・遺影写真のような肖像写真→もしかしてもう死んでいる？（箆笥の古道具がからっぽ）

○舅のおかれた立場

- ・あひるの骨の煮込み～グロテスクな描写→老人の日常のようだ（静かにしつこくぐつぐつ煮込まれるスープ、黄色く濁った油の膜、によきによき突き出た骨、執拗なおい）
- ・特段することもない日常～写筆をしたり、散歩に出かけてがらくたを拾ってくる位なもの
- ・頑固で偏屈、無愛想、自分の日々の行動スタイルにはこだわり（あひるの煮込み、筆写、がらくた拾いなど）特段悪意のある言動があるわけではない
- ・身内に対し冷淡な理由は？（娘や孫に対しても） これまでどのような人生だったか？

○舅の財産を巡って

- ・シルバータウン～高齢者の共同生活住宅（3000万ウォン、運動・旅行・看護つき）
- ・夫は投資で父親の財産をすったにもかかわらず黙っている、後ろめたさから帰宅が遅い
- ・舅なりの気遣い（孫が生まれる前に家を出たい）

○202号室の女、30万ウォン貸した意味

- ・ヨンスクにとっては夫より舅より執着する存在
 - 30万ウォンで子供の箆笥を買うつもり
 - 目の前の小さな希望、せめてもの救い
- ・舅はなぜ202号の女に30万ウォン貸したのか
- ・202号の女はどこへ行ったのか
- ・もしかしてヨンスクの妄想？

○その他

- ・ヨンスクの妊娠と聖書の中の一節（舅から夫、夫から子へとつながる系図）
- ・ペンのインクが漏れ出す
- ・あひるの煮込みを煮詰める行為

※キムスンの作風など

- ・キーワード～『不安』（一人取り残される、人が家に攻め込んでくる、何か起きる）
外的要因より内的要因による不安感、幼少時代の実体験から
- ・この世にいるかいないかわからない、どこにも属さず役割のない人たちを描く
 - しかし、ある日がぜん存在感を示し周囲の人々に意外な攻撃性をもつ人たち
 - 『白痴』：朝鮮戦争の後、砂漠建築現場、ベトナム戦争、西ドイツ鉱山などで苦勞し帰国したが資本主義にシステムの犠牲になり職もなく酒びたりの人たち
 - 『私の美しい罪人たち』：私小説的、浮気し娘を捨てる母、中風の祖父、精米機械で片腕を怪我した祖母など、孤独な少女の内面の成長
 - 『鉄』：肉体労働者：集団の疎外、産業化の暗い側面、出口のない絶望
- ・人間の苦痛はたやすく改善されないもの

意見交換

読書会の意見交換で出た主な意見は次のとおり。

○舅がすでに死亡していると想定するといろいろなことの辻褃が合う。夫と202号の女が一緒に逃げたとも考えられる。ヨンスクは気が変になっている。あひるの煮込みを煮詰めるのは、得体の知れない舅の芯を見たいという願望の表れでもあるのでは。

○あひるの煮込みを干上がるまで煮詰める行為は、いやなものはいやだという意志表示で、そうすることにより気持が吹っ切れた。

○ヨンスクはマタニティブルーのせいか、被害妄想ぎみ。舅は悪い人ではなく、行動も納得できる。それを受け入れるヨンスク側の問題。

○いろんな解釈ができるが作者は敢えてはっきり結論を示さず、それが不安感を醸し出す。ヨンスクは帽子の下や箆笥の中まで舅がいるのではないかとのぞいて確かめるが、恐怖感をもちながらも舅を捜し求める気持が強いからでは。202号の女は、しばらく前に既に死亡しているのかと思った。

○結論が見えない分、読んでいる方まで不安に駆られてくる。読者がいろいろに読めばいい。随所にうまいしかけがしてあり、文章の上手な作家。

(参考)

出典

p. 197	11. 19-20	旧約聖書	民数記	第31章-20
p. 198	11. 5-8	〃	〃	第31章-22、23
p. 206	11. 11-14	〃	〃	第33章-15
p. 207	11. 14-16	〃	創世記	第11章-10